

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 17 日現在

機関番号：12604

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23730732

研究課題名(和文) 初期近代の知の再編からみたコメニウスの教育構想と世界の表象に関する思想史的研究

研究課題名(英文) A research on the educational thought and the representation of the world in Comenius from a perspective on a reorganization of the knowledge in early modern Europe

研究代表者

下司 裕子(北詰裕子)(GESHI (KITAZUME), Yuko)

東京学芸大学・教育学部・講師

研究者番号：30580336

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円、(間接経費) 540,000円

研究成果の概要(和文)：コメニウスの教育思想の根幹には、神が創造した世界そのものを「神の書物」として捉える世界観と、神の三書(=世界・人間・聖書)を読み学ぶ存在としての「人間」観、そして、神の三書を読むために人間が人間のために書き続け・書き直していく書物、という根源的な書物論があることを明らかにした。近代教育において高く評価されてきた『世界図絵』等のコメニウスの教科書は、増え続ける書物と知をどのように取捨選択し、再構成し、伝えるのかという初期近代の知の再編という文脈におけるコメニウスの一つの回答であったといえる。

研究成果の概要(英文)：This study clarified that educational thought of Comenius has the following features. 1) He regarded this world as a "school of wisdom of God". 2) To read the "three books of God" (World, Human, Bible) is the ultimate aim of education in this world. 3) But to read and to recognize God's books is very difficult for human, so the manual or guidance books about them are required. Namely, in Comenius, "Three books of God" is regarded as to be a measure for selecting the necessary things and knowledge for human beings. And the idea of "Three books of God" is considered to be an effective model in reorganizing various knowledge from manmade books which continue to increase, and reconstructing educational values. Textbook by Comenius(ex.gr. "Orbis Pictus") has been highly valued in modern pedagogy was created as a guide to "three books of God".

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：コメニウス 教育哲学 教育思想史 17世紀 言語 世界観 書物

1. 研究開始当初の背景

コメニウス研究は国内では教育学がその中心を担ってきたが、ヨーロッパでは「コメニウス学(Comeniology)」として教育学のみならず、歴史学・文学・哲学・宗教学等、領域を横断し一つの学問分野を形成するほどの幅と奥行きがある。

とはいえ、国内外のコメニウス研究の多くは近代教育に連なる学校構想やカリキュラムの発案、各種教科書の作成や一斉教授の評価を中心にコメニウスを「近代教育学の端緒」として位置づける枠組みを踏襲しその枠組みの中でコメニウスのテキストを解釈してきた。そのため、コメニウスが生きた17世紀という思想的文脈のなかで彼の教育構想を捉え直す試みは十分になされてこなかった。

だが近年、わが国でも、相馬(『近代教育思想とデカルト哲学』ミネルヴァ書房 2002)によるデカルト哲学との関係からコメニウスの哲学的基盤を捉え直す試みや、加藤(「教育における2つの近代 ヒューマニズムと認識論」『教育哲学研究』100号記念特別号 2009)による、存在論や新プラトン主義との関わりでコメニウスの教育思想を再読する試みなど、コメニウスを汎西欧的・同時代的な知的背景の中で把握する動向が生まれてきている。こうした研究は、直接的に海外の研究動向の広がり(Chocholová, Pánková, Steiner ed. *Jan Amos Komenský Odkaz kultuře vzdělávání, Johannes Amos Comenius The Legacy to the Culture of Education*, Academia, Praha, 2009)と相互影響関係にあり、国際的な同時代生が認められる。

2. 研究の目的

報告者は以上の背景をふまえ、17世紀ヨーロッパの言語論・身体論・修辞学教育の編成・学校演劇・寓意画集といった諸文脈の重なり合いのなかで、コメニウスの教育構想を読み解く研究を行ってきた。

本研究の目的は、これまで個別的に発表してきた研究成果を「表象 representation」という観点と、コメニウスにおいてそれを構想可能にする「事物 res・言葉 verbum・書物 liber」を軸に整理し直し、そこから析出された彼の教育思想を総合的に考察し、博士学位請求論文としてまとめ上げることである。

それにより近代教育の端緒とされてきた彼の教育的伝達形式の成り立ちを明らかにすると同時に、現代の教育における表象の問題(何をいかに選び取り、どのような形式で提示するのか)に対する歴史的参照点として積極的な示唆を与えることを目指すものである。

3. 研究の方法

本研究は、コメニウスの教育思想史研究である。コメニウスをまさに諸価値の移行期であった初期近代における知の再編という文脈に置き直し、ある価値観と伝達形式が「教育的なるもの」として選ばれるその背景と理由を、一次文献の精読と、諸二次文献の読解を通して明らかにした。

そのため、特にコメニウスに関する主要一次文献としては、『大教授学』(*Didactica magna*, 1657) や『開かれた言語の扉』(*Janua lingvarum reserata*, 1631)、『世界図絵』(*Orbis Pictus*, 1658)、といった代表的な教授学的作品や言語教科書のみならず、学校演劇の脚本である『遊戯学校』(*Schola Ludus*, 1656)をあわせて考察した。また、形而上学的著作とされてきた『開かれた事物の扉』(*Janua Rerum Reserata*, 1680)と、哲学的著作とされてきた『光の道』(*Via Lucis*, 1668)を精読し、さらにコメニウスの書物論「書物について」(*De Libris*, 1650)、彼の晩年の著作である『人事の改善に関する総勧告』(*De rerum humanarum emendatione consultatione Catholica*)における『汎教育』(*Pampaedia*, 1660 頃執筆、手稿の発見後 1966 出版)を分析した。

さらに、ペトロ・モンタヌス宛書簡や、同時代人であるウィルキンス(J. Wilkins, 1614-1672)の著作(*An Essay Towards a Real Character, and a Philosophical Language*, 1668,)とその相互影響関係等を解釈の文脈に組み込みことで、従来なされてきたコメニウスの著作の位置づけを問い直し、新たな観点から統一的に理解する可能性を開いた。

4. 研究成果

本研究全体の成果を要約するならば、以下のようになる。

コメニウスの教育思想を17世紀当時の文脈に置き直し、(1)「事物主義」の内在的再検討と、(2)コメニウスの教育思想を支える世界観の再考を軸に研究を行い、以下の点を明らかにした。

(1)コメニウスにとって事物とは、「神の知恵 sapientia」や「イデア idea」に繋がるものであり、従来の近代教育学的な事物主義が想定してきた眼前の観察対象としての客観的事物とは大いに異なるものである。

近代教育学において「事物主義」は、近代的リアリズムに繋がる感覚可能な実物の教授として捉えられるのみで、17世紀当時の文脈の中で考察されてこなかった。対して本論は、コメニウスの事物認識そのものを明らかにするため、事物・観念・言葉の関係性を問題とした17世紀の普遍言語構想におけるコメニウスの言語観と、相互影響関係のあった

英国王立協会員 J. ウィルキンス(J. Wilkins, 1614-1672)の言語観を比較・分析しその特徴を明らかにした。

第一に、普遍言語構想 コメニウスをはじめとする当時の多くの知識人たちがそこに参画し隆盛をみた汎ヨーロッパ的な共通語の構想を歴史的に整理した。特に英国王立協会のウィルキンスの普遍言語構想に、コメニウスの『光の道』(Via Lucis, 1668)が影響していたことを言語学史の諸研究から明らかにした。そのうえで、コメニウスの言語観が言語学では前近代に、教育学では近代に位置づけられることを指摘し、この分裂が、17世紀的な「言葉と事物の乖離」(フーコー)に起因することを明らかにした。

第二に、コメニウスの「事物」観を、ウィルキンスと対比させることによって明らかにした。

まず、『光の道』を分析し、コメニウスが普遍言語を「事物そのもの res ipsa」に近い形で構想したことを明らかにした。あわせて、コメニウスの『開かれた事物の扉』(Janua Rerum Reserata, 1680)を分析し、事物は観察可能な眼前の対象としてではなく、神の秩序やアイデアを映し出すがゆえに重視されたことを明らかにした。そのうえで、ウィルキンスの『実在的概念文字と哲学的言語に向けての試論』(An Essay Towards a Real Character, and a Philosophical Language, 1668, 以下、『試論』)を分析し、彼の普遍言語が観念の記号であるという特徴を明らかにした。

第三に、事物 = 文字という発想について考察した。コメニウスは、事物そのものを図絵と文字によって示す視覚的な普遍言語を、ウィルキンスは、観念を視覚的な記号によって示す普遍言語を構想したことを明らかにした上で、その共通性と差異を分析した。

まず、コメニウスの『世界図絵』(Orbis Pictus, 1658)を 17 世紀当時の図絵描写の技法や文法書、エンブレム(寓意画集)との関連から分析し、その視覚的な特徴を明らかにした。次に、『試論』の分析を通して、ウィルキンスの観念を表示する文字 = 記号言語を、メディア論の文脈からオングやマクルーハンが指摘した文字文化における活字の特徴と併せて考察した。最後に、コメニウスの普遍言語が、事物を図絵として固定的秩序のもとに提示するのに対し、ウィルキンスの観念の記号は、記号の組み合わせの果てに最終的に表れる帰納的秩序を想定する点で異なることを明らかにした。

つぎに、事物主義を超えるものとして、コメニウスにおける声を考察した。

第一に、コメニウスの演劇的著作『遊戯学校』(Schola Ludus, 1656)を分析し、その中に、従来の研究においては相反するものとされてきた、事物の客観的提示とレトリック教

育とが渾然一体となって組み込まれていることを明らかにした。

第二に、文字と対比される声や身体に関する問題を、レトリック教育や学校演劇の文脈から考察した。

まず、『遊戯学校』が、中世以来の聖史劇とルネサンスの修辞学教育が 17 世紀の学校演劇に繋っていく文脈の中で書かれたことを明らかにした。次に、『遊戯学校』の形式と主題から、演じる生徒の身体そのものが「生ける百科全書」を成立させることを明らかにした。そのうえで、対話形式やレトリック、参加型の世界提示形式との連関から『遊戯学校』の特徴を分析した。

第三に、従来の研究においては検討されてこなかった、『遊戯学校』における全体的な世界像を明らかにした。

まず、対話の形式と登場人物(王)の位置を軸に全体を構造化した。そのうえで、『遊戯学校』全体の中でも特徴的な「学校」の場面を分析し、コメニウスに特徴的な「世界という学校」という思想を明らかにした。

『遊戯学校』は、「世界は学校そのものである」という世界観を軸に、そのなかの(狭義の)「学校」で上演される「学校についての学校演劇」という同型的な入れ子構造によって成立する舞台であった。

第四に、子どもに世界を示すという教育的な営みが 17 世紀においていかに実行可能とされたのかを考察した。

まず、『世界図絵』と『遊戯学校』において表象される「世界」や「事物」の諸相を検討した。そのうえで、『世界図絵』的な表象の特徴を 17 世紀における図絵と文字の観点から考察し、他方『遊戯学校』と中世以来のレトリック教育との関連を論じた。

『世界図絵』では、子どもを認識の対象としての世界に向き合わせるが、『遊戯学校』は人間の行為の網の目の中で、世界を表わす側として子どもを世界に組み込む。これらは相互に重なり合いつつも、相違点も大きかった。

以上の考察は、本研究の最終目標であった博士論文の第 部と第 部にてなされたものである。

(2) コメニウスの教育思想は、以下のような世界観によって成立していた。

第一に、人間が生きるこの世界を「神の知恵の学校」として捉えること。

第二に、「神の知恵」の学校では、神が記した「神の三書」(世界・人間・聖書)を読むことがその教育目的であること。

第三に、「神の三書」を読むという目的を達成するためには、人間が自らの言葉で書き記した書物が必要とされること。

この世界観の中では、近代教育学において対立するとみなされてきた、客観的知の教育(人間は世界をどう認識し、示すのかという

指示言語の問題)と、レトリックや身体的訓練(その世界をいかに語り・伝えるのかという側面)が調和的に行われていることを明らかにした。

以上の結果として第一に、従来の研究において自明視されてきた近代教育における事物主義と、そこでいわれる事物の内実を批判的に問い直すことを可能とした。

第二に、コメニウスの教育思想は現代の教育を考えるうえで、従来の研究が与えてきた「近代教育の祖」や近代教育学的事物主義という枠組みの中ではなく、むしろ、17世紀という諸価値の移行期の只中で、次世代に伝達すべき「世界」像をどのようにモデル化し、それに連関する有意義な価値をいかに取捨選択・創出し、どのように伝えるか、という考え方の構造そのものの歴史的参照点としてこそ、有効であることを明らかにした。

言い換えれば、諸価値の移行期を生きたコメニウスにとって、知の再編をもたらすものは二重の意味で「書物 Liber」であった。

それこそが、コメニウスにおける世界の認識(指示言語的な側面)と、そしてその世界を語り・伝えること(レトリック的な側面)を、「教育的な営み」として成立させる媒介項である。

すなわち、人間がこの世で学ぶべき全てとされる「神の三書」(「世界・人間・聖書」という強力な想定(メタファー)が作動することによって、何を選び伝えるかということが担保され、さらにその目的のために、実際に人間の手により作り出される書物が価値づけられ、意味を与えられる。

そこにおいて教科書とは、「神の三書」の手引き書として位置づけられる。

教科書の内容を「神の三書」の同型的縮小とすることが、コメニウスによる教科書執筆条件の最重要事項であった。

書物一般は様々な知を拡大・伝播するが、その分読み手に情報の取捨選択を求める一方で、教科書は、「神の三書」の同型的縮小であるがゆえに、その内容を読み手が「信じること」を前提とする特殊な書物であった。

従来の研究において、コメニウスは書物中心主義的教育に対する事物主義者として位置づけられてきた。対して本研究は、コメニウスが読書を推奨し、書物を重視していたこと、その背後には彼独自の世界観があったことを明らかにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

- 1) 北詰裕子「J.A.コメニウスの世界観と言語観に関する教育思想史研究」17

世紀における事物・言葉・書物」
博士論文(学位取得 2013年3月5日
日本女子大学 乙 第58号)

〔図書〕(計 2件)

- 1) 森田伸子編『言語と教育をめぐる思想史』勁草書房、2013年1月、執筆部分：北詰裕子「第一章コメニウスにおける読書論の諸様相 - 中世・ルネサンス・近代 - 」を執筆(51頁~95頁)
- 2) 森田尚人・森田伸子編『教育思想史で読む現代教育』勁草書房、2013年3月、執筆部分：北詰裕子「第9章教科書 - コメニウス『汎教育』における書物一般と学校用書物」を執筆(176頁~201頁)

6. 研究組織

(1)研究代表者

下司 裕子(北詰裕子)

(GESHI(KITAZUME), Yuko)

東京学芸大学・教育学部・講師

研究者番号：30580336